

構造Ⅰ：「伝統木造建築の構造」 宮本慎宏

- ・伝統構法は基本的に四角形の組み合わせ。三角はない。変形しやすい。
- ・在来構法は初期強度は高いが限界を超えると急激に強度は低下する。伝統構法は初期強度は小さいが粘る。
- ・基礎と本体、必ずしもつなげれば安全、ではない。
- ・鐘楼の束石と本体がずれて、倒れなかった、という例があるが、設計には反映しにくい
- ・竹、すすき、木他、小舞の材料は様々だが、それによる影響は少ない。一番効くのは中塗り。
- ・津波被害があったが建築の損傷についてはあまり聞かないが。→今も建っているということが、「もっているあかし」ではないか。
- ・地盤の種類、揺れの種類、粘り、強いバランスなど考慮して設計するのが大事。
- ・若い大工は親に習うべきか、新しい考えで行くべきか？→地域地域の構法には特徴がある。地域独特の工法が残ってきていることが、地域に合っていることの何よりの証拠。専門家に計算してもらっておくのも大事。
- ・小舞のピッチは狭い方がよいのか？→狭すぎると土が込められない。標準で。

構造Ⅱ：「徳島すぎとMDFを用いた充腹梁工法」の開発について 中村康一

- ・スパン三間を超えると集成材になるが、徳島に集成材工場はない。
- ・初期たわみ以降の増加するたわみ（クリープ）が重要。より長期に渡る慎重な計測を求められている。

第3部：意見交換 コーディネーター平野陽子

- ・充腹梁：確認申請に支障の無いようにするための「お墨付き」としての「性能認証」。許容せん断応力、許容曲げモーメント。
- ・木、土壁、しっくい・・・仕上げが固くなるとまずい。土壁に筋交い、など、組み合わせるのは危険。伝統木造でやるなら伝統構法で統一すべき。
- ・固有周期、固い 在来構法：0.2 s 伝統木造：0.4 s →揺れが続くと、周期はのびてゆく。
- ・その場所の地盤、想定される地震の種類、他、入れて計算するのがベスト。
- ・倒壊は生死に直結する。長尺材を使えば、生命空間を確保しやすい。少々壊れても他でうけもつ。
- ・木材そのものはそもそも「強い」。仕口、継手できまる。
- ・一か所の耐震壁の壁量を増して全体を担うのではなく、適度な耐力を分散するという意味で、建具耐震の考え方には合理性がある。
- ・リフォームなど、規制しすぎても動かなくなる。
- ・木研と佐那河内村で策定中の改修マニュアルを広める。
- ・改修の、プロ向け相談窓口があれば。
- ・施工業者、不動産業者ともリンクが重要。
- ・リフォーム→手刻み→大工さんの修練が必須。
- ・木造建築の構造は研究が進み、もう実用段階にきているが、仕様が煩雑でなかなかスピーディにはいかない。
- ・どうでもいいことと大事なことが混在している。
- ・木造建築をすすめるための、より大きなロードマップを。汎用につながるように策定すべき。



第一部：宮本先生



第三部：平野氏、宮本氏、中村氏と建築士会佐藤会長